



TITLE:

(随想) 脊髓膀胱

AUTHOR(S):

山本, 弘

---

CITATION:

山本, 弘. (随想) 脊髓膀胱. 泌尿器科紀要 1958, 4(9): 481-482

ISSUE DATE:

1958-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111661>

RIGHT:

# 泌 尿 器 科 紀 要

第 4 巻 第 9 号

昭和33年 9 月

## 随 想

### 脊 髄 膀 胱

大阪通信病院 泌尿器科部長 山 本 弘

颱風17号が来襲した翌日はかくべつ念入りの暑さであつたが、はしなくも此の日読んだ毎日新聞夕刊随筆欄“憂楽帳”の一文が忘れられない。筆者は長沼弘毅氏、残暑と題して、中国では残暑の候ひたひたと忍びよる秋気を「争秋奮暑」と称し、之は曆日立秋を期して秋は徐ろに牙をむきだし夏に挑戦する状を形容したものであるという。芭蕉の“あかあかと日はつれなくも秋の風”に比べずいぶん戦闘的な表現方法もあるものだと思つた。併し私には、此の言葉は却て争秋の対象晩夏將軍の威容の表現に生々しい逆説的效果を与え、天空に聳ゆる雲峰に跨つた夏日の爛々たる眼が感じとられた。更に妙なことは、この時ふと脳裡をかすめたのが此の国に於ける泌尿器科の立場といつたふうの連想であつた。「争秋奮暑」からどうして泌尿器科学を連想したかは、まことに奇妙なことである。恐らく暑さに消耗した脳神経が一瞬異常結合反応を散らしたものに相違ない

之はさておき、我が国の泌尿器科学の現状ほど不可解なものはあるまい。斯学の分離独立が叫ばれてより30年有余にもなるが、医育機関に於てすら講座確立が遅々として進まず、他は殆んど歯牙にもかけられてない有様である。ベン業者が到底旋盤工たり得ないことは自明の理であるに、敢て之等と一緒に横行する図は正に世界七不思議ものであろう。数年前、かなり進歩的と思つていた某臨床教授の、泌尿器科なんてものは外科学で代行出来るのではないかとの言葉に愕然とした事がある。斯ような他の医学分野の人々の無理解が、案外我が国の斯道独立を阻む大きな障害となつていのでなかろうか。さすれば之に憤りを抱く前に先ず己の不敏怠慢を三省しなければならぬ。泌尿器科学は所詮地道な学問であろうが、その特殊性と多分に未開拓分野を包蔵する点樂みが多い新興部門であつて、米国では今や整形外科学と其の高さを競う勢を示すとか。敗戦の空白を克服し一日も早く米英泌尿器科のレベル迄到達したいものだ。就中、若き泌尿器科学徒の奮起を期待する所以である。

それにつけても戦後初めて米国雑誌を入手した時の感激が思い出される。脊髓膀胱の如きも、当時驚きの目をみはつた問題の一つであつた。

Cord bladder なる言葉に遭遇したのは確か Emmett 等の論文である。True cord bladder とか pseudo cord bladder が随処に現われるのに全く戸惑つたものである。云うまでもなく、脊髓膀胱とは脊髓外傷に因る神経因性膀胱機能障害の謂であつて、此の略語は米国では盛に使用されている。例の米国式簡略化というなかれ、外傷性脊髓膀胱麻痺患者

の成因と病像を現わすに之程びつたりとした便利な言葉はないとさえ思われるのである。現在泌尿器科学が当面する最も難解な分野の一として神経因性膀胱機能障害があげられ、之を代表するは所謂脊髓膀胱に外ならぬ。之を離れた神経因性膀胱機能障害は論外であり、本症解明の為多くの難問が山積している今日、せめて適当なる用語を決定し之を国際的に統一出来ぬものであろうか。

脊髓膀胱に就ては私には苦い思い出がある。今にして思えば一場の笑新に過ぎないが、当時はほとほと思案に余つた診療経験である。終戦後間もなく尿閉患者が入院した。最近中支より帰還した21才男子で、終戦直前腰部に砲弾片による擦過傷をうけ、以後尿閉と尿失禁に悩みつつ護送されたという。入院時第Ⅲ腰椎部の傷は略々4厘の瘢痕をもつて治癒し、激しい排尿困難、陰茎勃起力の消失及び会陰部を中心とする知覚麻痺を訴う。四肢の運動障害は認めない。

本症は明かに排尿中枢以下の脊髓不完全損傷による脊髓膀胱である。悲しいかな当時の私にはこの方面の知識は皆無であつた。そしてこの患者に対し3つの過誤を侵したのである。第1は、夥しい残尿を伴つたこの激烈な膀胱障害の原因を結局つきとめ得なかつた怠慢である。脊髓膀胱なる言葉の存在すら知らなかつた幼稚極まる医師は、唯膀胱頸部の著明開大と高度の肉柱膀胱形成を啞然として見送るのみで、歴然たる腰部瘢痕に一顧もくれなかつたのである。其の2は、余りにも太いカテーテルを留置することによつて、陰茎陰囊移行部を中心に褥瘡を発生せしめた失敗である。尿瘻形成にまで到らなかつたのがせめての慰めで、思い出すだに冷汗のものであつた。第3は、其の後発生した尿酸結石が異常に拡張した後部尿道に陥入し、之が剔除に数時間悪戦苦闘するお手際の悪さを発揮したことである。幸に入院後一年余り結石除去を契機として恢復に向い、会陰部知覚麻痺の消退につれて自然排尿も可能となり、勃起力も再生した。現在2児の父である。

当時かずかずの失敗に自責の念にかられつつ経過を見守っていたが、正常排尿を見るに及んでも尙半信半疑であつた。核以下の脊髓不完全損傷型では、神経機能の復元に相まつて屢々正常排尿可能の段階まで到達するのは敢て不思議でない。要するに患者は治癒すべくして全治に赴き、此の間一定の時のみを必要としたのである。而もその恢復途上に於て褥瘡、結石等の合併症が発生し、自然治療は著しく遅延した。病床日誌は、医師の無知なるが故の尿路管理の不当を永遠に物語るであらう。

こんな不名誉の体験を経て2年目私は **cord bladder** に関する論文を読んだ。湧きあがる歓喜が忽ち全身を包んだことを記憶する。

脊髓膀胱に興味をもつ人々を絶えずおびやかす悩みは、峻嶒たたなわる密林地帯に踏み迷つた旅人の夫れである。一峰を越えてはつとすれば又眼前に雲つく一山がのしかかり、三步の前進に百歩の後退が続き忽ち振り出しに戻る。理論の難解と診療の煩雑は哲学的様相をおびるとさえ思われ、屢々昏迷巻を措いて膀胱排尿生理の神祕を三嘆するであらう。

1936年 Munro が **cord bladder** と題する先駆的論文を発表してから早くも20年余、今尙混乱期を脱し得ないとはいへこの方面の最近数年間の進歩は目覚ましい。本問題に限り幾多先人の業績を目にする時、特に其の血涙の努力の跡に対し絶大の敬意を払はねばならぬ。之が研究程地味なものではなく、又異常の忍耐を強要するものは稀であると思われるからである。

本年3月友人某教授は、加洲ロングビーチに於ける Bors を訪問した。Ernest Borsこそ Munro からバトンを引きついで現代脊髓膀胱の第一人者である。彼はこの方面の研究の報われざるをつくづく嘆息したという。